

## 5 読みきかせについて考える

### 1 研究の経過

絵本の読みきかせは、多くの学校で、いろいろな時間にちょっとした場所で実施されているのではないだろうか。本校でも他校と同じように、教師が自分の考えで、朝の会や終りの会・生活の時間等に絵本の読みきかせを実施してきた。特に高等部の国語の時間に、10年ほど前より絵本の読みきかせを実践している例は、他校に類をみないのではないだろうか。

しかし、読みきかせを実施していても、「どんな本を読んでやったらよいだろうか」「どのように読んでやったらよいだろうか」等の疑問を感じながら実施していたようである。そこで、そのような疑問をもった教師が集まり研究してみるようになった。

初年度は、試行錯誤を繰り返し研究が進められた。研究をしていく中で、子どもたちに、「絵本は楽しいものだ」ということを伝え、「豊かな感動がもてる心」を育ててやろうと共通理解をもった。また、本校の子どもたちは生活経験が乏しいので、言葉や知恵・思考力・想像力・人間関係を豊かにしてやることも話しあった。

実践としては、各担当クラスでの生活や国語の授業、終りの会等での読みきかせと、全校生徒を対象として週1回昼食後に和室で読みきかせ（「絵本の日」）を行なった。これらの実践を通して、①本の充実や書架の配置、②本の選び方や読みきかせ方等を、グループ研究会で討議した。

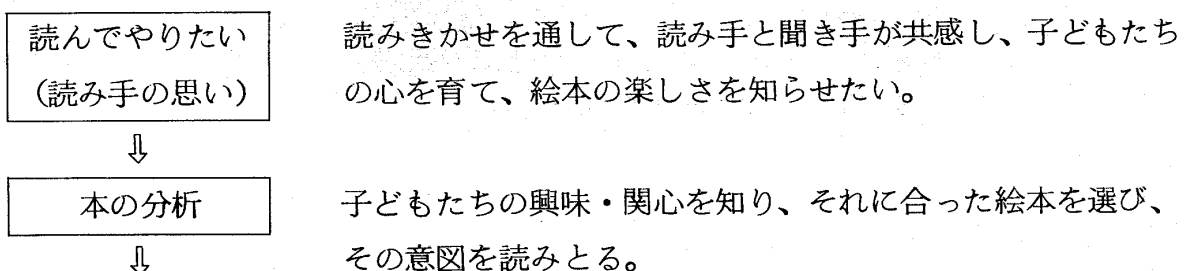
昨年度は研究も2年目をむかえて、子どもの心をより豊かにするため、前年度の反省をふまえ、読みきかせの基本的な心づかいを確認した。

実践として、各担当クラスや和室での読みきかせは、前年度よりもさらに深められた。この実践を通して、新たに、①学級通信や連絡帳で親への啓蒙、②読みきかせ時の雰囲気作りや読みきかせをする技術、絵本のイメージ化等についてグループ研究会で話しあわれた。

### 2 本年度の研究

#### (1) 読みきかせにおける気づき

##### 読みきかせの流れ



読みきかせの  
工夫手だて



読みきかせる



子どもの成長

子どもたちが、より感動をもてるような読みきかせ方・手だてを考える。

絵本の意図をくみ取り、読み手は子どもの視線・表情を受けとめて、心をこめて読みきかせる。

子どもたちはたくさんの絵本から、多くの感動を得て、豊かな感性・創造力・ことば等が育つ。

### 気づきについて

読みきかせにおける気づきとは、何だろうと考えた場合、読みきかせをしている時に、感動のあまり声が出る、または、読み終わった後に感想を言ったり、書いたりする。これは、感じたことを表現したことであり、感じたこと、それが気づきなのである。

しかし、知恵遅れの子どもたちの中には、このように気づきを表現できる子は、あまり多くいない。また、多少ことばがある子どもは、絵本に視線を向けたり、絵本の中のリズムカルなことばをつぶやいたり、体をゆすったりして、彼らなりの表現をしてくれる。まして、障害の重い子どもの場合は、表情が少し変化する。こち良さそうに喃語発する。読み手の方にチラッと視線を送る程度である。

このような知恵遅れの子どもたちの気づきは、普通考えられる子どもの気づきと比較して、一見して分からないことが多い。だから、絵本に関心・興味があるようには見られないのである。しかし、子どもたちは感ずる心をもっていると我々は考えている。その心をもっとゆさぶっていかなければならないのである。だからこそ、知恵遅れの子どもたちに読みきかせは必要なのである。このような子どもたちだからこそ、読み手である我々が、より気づかせるために、いろいろな手だてを試みていかなければならないのである。

今まで述べてきたことば、主に子ども側の気づきに目を向けてきたが、我々読み手側の大切なこととして、“子どもの気づきに気がつく”ということである。いくら子どもたちに気づきがあっても、読み手側がそれに気づかないと、子どもたちの興味の本質が見えなくなってしまう危険性もあるのである。

このように、我々読み手側がいつも聞き手側である子どもたちのことを見つめていき、そこから学ぶという姿勢が非常に大切なのである。

## (2) 研究の経過

今年度の研究会では本の分析や読みきかせの実際についての実践をもちより話し合いを重ねた。その中で一人ひとりの子どもについて相互理解するとともに読みきかせの意義についても再度確認された。時には読みきかせの様子をビデオにとり、日頃、見逃してしまいがちな子どもたちのわずかな感情の表出とそれに対する読み手の対応にも検討を加え、より楽しく充実した読みきかせの時間がもてるようにした。

読みきかせの場	対象児童・生徒	実施時間
朝礼・終礼	小学部2組	毎日
	小学部3組	週1回
グループ学習	中学部Cグループ	週2時限
	高等部A～Dグループ	週2時限
校内絵本の日	全校児童・生徒のうち希望する者	週1回

## 3 実践

### (1) 小学部二組の実践

このクラスは三、四年生8名で構成されており、自閉傾向3名、ダウン症3名、その他2名という障害状況である。

言葉がなく全面的介助の必要な子が2名、一語文～二語文を使いなんとか会話の可能な子が4名、会話ができ本をすらすら読める子が2名と、大変能力差が大きいクラスである。

全般的に落ち着きに欠ける面はあるが、学習に向かう態勢はできている。

読みきかせは毎日下校前の20分程度を利用し行なってきた。下校前にできないと思われる時は朝の会で行なうなど毎日必ず絵本と向き合う時間を作ってきた。

四月は学級のリズムが整わず下校前の20分が取れなかったり、子供たちが落ち着かず絵本に集中することができなかった。でもなんとか読みきかせをしたいと取り組んでいった。そのうちだんだんと学級のリズムが整い始め、私たちも子供がわかり、ほぼ毎日読みきかせが行えるようになって、絵本に視線をに向ける子が増えてきた。

#### ① 子供たちと読んだ絵本の中から

『あさえと ちいさないもうと』 筒井依子作

林 明子絵

福音館書店

#### ◇取り上げた理由

3・4年生になると自立心が芽生え始めてくる子がいる。自立には不安がつきも

のだが、子供はたくさんの不安を経験しながらそれを乗り越え確実に自分を作り上げていくように思う。

主人公あさえは母親から留守番を頼まれる。そこには母親から一人前に扱われたあさえの姿がある。しかし、その間に妹がいなくなってしまう。妹を捜し回るあさえの不安、それはまさしく自立への不安なのではないだろうか。妹が見つかりほっとするあさえの気持ちに子供たちも共感してくれるのではないかと思い、取り上げた。

◇読みきかせるにあたり配慮すること

長い文章なので時々子供たちに問いかけながら、ゆっくり心を込めて読みたい。

◇児童の反応

妹が見つかり「ああよかった」と呟き胸をなでおろすY子。「おった！」と小さな声で呟くT男。緊張した顔がほぐれニコッと笑うK男の姿が見られた。

絵本を飽きることなく静かに見入る子どもの姿に、読み手自身も感動し絵本を共に楽しむことができた。絵本の世界に引きこまれ、主人公あさえと同化しその世界であさえと同じ体験をし自分を大きく膨らますことのできるY子、T男、K男の姿から、もっとたくさんの絵本に出会わせてあげたいと思った。反面、絵本に視線を向けることがほとんどできなかった自閉傾向のH男や文章の中の一つの言葉にだけ反応し呟いていたM男の事が気になった。この子たちの生活意識に合わなかったようである。

『み ず』

長谷川摂子文

英 伸三写真

福音館書店

◇取り上げた理由

自閉傾向M男、H男は水遊びが大好きである。そんな彼らの大好きな水の感触を絵本の上でも楽しむことができたらと思いこの本を選んだ。

この本は写真の本で水の感覚を大切に表現しており、水の透明感や躍動感をそのまま感じることができる。

水の感覚を通して、心を揺さぶることができればよいと思う。

◇読みきかせるにあたり配慮すること

視線がなかなか絵本に向かない子には、できるだけ側に近づけ見せるようにしたい。また、文章を読むだけでなく子供の呟きをたくさん受け止めて、一つひとつの場面を楽しみたい。

#### ◇児童の反応

M男は、淡々とした表情で本に見入っていた。時々視線がずれていく。見終わって本を手渡すとそれを見ながら「ぎーぎー」と呟いた。また、H男は蛇口から噴き出す水や流れる水など、水が動き躍動感のある場面はよく見るが、静止した状態の場面や他児との言葉のやり取りがあると視線がずれていった。障害の重いS子は嬉しい時に出る「うーうー」と声を出して終始見入っていた。それから何か月かたったある日、今まで絵本を手にとることがなかったM男が机の上においてある『みず』の本を手に取り、海やプールで子供たちが泳いでいる場面をじっと見ている姿が見られた。

あまり絵本に視線を向けることのできないM男やH男が写真の本の中に、自分が体感した大好きな世界があることがわかり、視線を向けていった姿から、子供にあった絵本を選ぶことの大切さに気づかされた。

またくり返し読むうちにM男やY男は少しずつ教師が読んでいる絵本を見るようになり、視線を共有できるように育ってきている。

写真の本を手がかりに絵の絵本の楽しさにも気づけるように読みきかせたいと思った。

『今日はみんなで くまがりだ』

マイケル・ローゼン再話

ヘレン・オクセンバリー絵

山口文夫訳

評論社

#### ◇取り上げた理由

子供たちの中には、追いかけてごっこが大好きで、休み時間になると学校中を駆け回っている子がいる。この本は、子供の大好きな追いかけてごっこと共通する面白味が感じられる。

また遊び歌がもとになっており、繰り返しの言葉や擬態語がたくさん含まれており、言葉遊びとしても楽しめる。

#### ◇読みきかせるにあたり配慮すること

繰り返しの部分を子供たちと声を合わせて読んだり、動作で表現することを入れて、絵本からはなれ、遊びながら読み進めたい。

#### ◇児童の反応

追いかけてごっこの大好きな三人の子供たちが特に興味を示した。T男は「ペタペ

タ」「パシャパシャ」の言葉に喜んで笑う。洞窟に入るところから絵本に視線を向ける子が増えてきた。Y子は椅子を離れ絵本の前にしゃがみ込んで見始めた。熊に追いかけられる場面では大きく目を開けて真剣な顔になる。K男もじっと見ていたが終わると「もう一回読んで！」と言って訴えてきた。Y子は絵本を借りていくと胸に抱きしめ離さなかった。

何度もくり返し読むうちにT男は文章の一部分を覚え、読み手と交互に読むことを楽しむようになり遊びの最中にもその言葉が出るようになっていった。また、K男も、買い物に行った帰り道路に寝そべっていた犬を見て怖くて躊躇していたが、一言「通り抜けるしかないようだ！」と絵本のなかの言葉を言って走り抜けた。

読みきかせを続けていくうちに、その絵本の言葉が子供の中に入り生きたその子の言葉となって動き始めてきた。絵本のなかの行為や言葉をもう一度現実の生活の中で体験する事で、自分自身の世界を広げているように思われる。

楽しく読みきかせをする中で、豊かな言葉にもふれさせていきたい。

## ② 自由読書の中から

読みきかせを続けるうちにその時間を楽しみにする子が増え、それぞれに大好きな絵本があることがわかってきた。そこで、もっと子供たちが主体的に絵本に向かい、自分のペースでゆったりと絵本を楽しむことができないだろうか、絵本を楽しむことのできない子供たちに個別の関わりの中で楽しみを伝えることができないだろうかと思い、土曜日の生活を自由読書の時間として取り組むことにした。

教室の真ん中に絨毯を敷いて、読みきかせてきた本や、まだ読みきかせていない本を30冊程度置いた。「さあ、



絵本を見ようか」と声をかける。絵本を部分的にでも楽しめるようになった5名の子供たちは、それぞれ教師に声をかけられながらも自分の気に入った絵本を取り出し読み始めた。先生が読むような口調を真似て絵を見ながら話しているT男。いろいろな絵本を次から次と片っ端からめくって絵を楽しんでいるK男。Y子は文字をたどりながらじっくり見入っている。I男はりんごの本を見ながらしきりにむしゃむしゃ食べる仕草をしている。隣りに座っているT男の口にもひょいといれている。U子は絵本中の絵と同じ動作をしながら教師に話しかけている。一方、H男は教師の顔色を見ながらロッカーの中から紐を取り出し遊び始めた。「今は絵本だけ」の声かけにしぶしぶとしまい、そばにある絵本をとんとんたたいている。S子も絵を

眺めながらも絵本の角を折りまげ紙の感触を指で楽しんでいる。二人とも物理的な部分で絵本と関わっている。M男は宙に文字を書いていたが、声掛けで絵本を見る。しかし長続きしない。そこでH男をひざに乗せ彼の好きな絵本を読み進めた。ひざの上でのんびりと身をゆだねるH男。絵本を媒介にして読み手と関わることにここちよさを感じているかに思える。読み手の身体を通しての揺さぶりの中から、絵本の楽しさに気づいて行ってほしいと思う。

この時間に子供が自ら選んだ本はほとんど今まで読みきかせてきた絵本だということがわかり、読みきかせの大切さを改めて感じた。また、一人ひとりの子供の選ぶ本から、子供の興味や関心を知ることができた。絵本を楽しめない子供たちの取り組みについては長い目で見ていかなければならないし、どのような方法があるか今後とも考えていきたい。

最後に、子供の気づきをていねいに見ていく中で読みきかせがどれほど子供の心を豊かに育むか知る事ができた。これからもたくさんの絵本を読みきかせていきたい。

## (2) 小学部 3 組での実践

小学部 3 組での読みきかせは、週 1 回木曜日の 5 限の生活の時間に実施している。しかし、5 時限の時間を全部使って読みきかせを行えるわけではなく、5 時限の終り頃、子どもが下校の仕度を終えてから、下校の挨拶を行うまでの 10～15 分のわずかな時間である。このクラスでの読みきかせの場所は、黒板の前で教師の回りに椅子を寄せて、子どもが集まり行なっている。

このクラスには、7 人が在籍し、うち 6 名が自閉傾向児、1 名が単純精神薄弱児である。この子たちの言語能力は、簡単な日常会話ができる子が 1 名、1 語文～2 語文を使いたどたどしい会話ができる子が 2 名で、他はほとんど言葉がない状態の子どもたちである。したがって絵本に対する反応も、絵本を読む子が 1 名と、読みきかせに対して部分的に「おかしいわ」等の感想が言える子が 1 名、絵本の絵で生活体験のある絵がでてきた時や（主に食べ物や自動車等）、響きのよい言葉が聞こえた時、絵本に対して反応を示す子が 4 名、読みきかせを始めると不機嫌になる子が 1 名いる。

1 学期の初め、3 組は自閉傾向のある子どもが多いので、その子たちに的をしぼった読みきかせをすることにした。しかし、どんな絵本を読みきかせていいのかわからないので、昨年度 2 組で興味を示した、『あかちゃんのおそびえほん』シリーズの絵本を読みきかせた。この本はしかけ絵本で、絵は食べ物等を描き、内容はリズムカルな言葉で書いてあるので興味を示したのだが、今年度は、慣れてしまったからか 2 回目から関心を示さなくなった。そこで担任と相談して、前年度学習して読みきかせた

ことのある『ころ ころ ころ』という絵本を読みきかせた。この絵本は単純で、視覚的に美しさを感じさせる絵本だからか、いつもなら絵本を見せても、よそ見をしている子が、「チラッ」「チラッ」と見ていた。さらに、教師が指示すると色玉を必ずなぞっていた。この本は、自閉傾向のある子どもたちが、比較的長い間絵本に視線を注ぐことができた本であったので、繰り返しくりかえし読みきかせた。次に、休憩時間に3組の子が見ていた絵本『もこ もこ もこ』を、みんなの前で読みきかせた。この本は単純で、鮮明な色を使って描いてあるからか、自閉傾向の二人の子どもが常に関心を示した。読みきかせの時も、書いてある内容以外に、読み手が言葉をつけ加えて読みきかせたので、他の子どもたちも時々絵本をみていた。また、絵本を見せると絵をなぞりながら、言葉のない子が「もこ もこ」「によき によき」とつぶやいていた。それで、繰り返しの言葉が多い絵本を読みきかせることにした。『ころん ころん』『ごつん ふわふわ』の絵本を読んできかせたが、繰り返しの言葉の意味が理解できないからか、2回目ごろには注視しなくなった。

2学期になってからも、音の繰り返しが書いてある絵本をひき続き読みきかせることにした。『ばしん!ばん!どかん!』『がちゃがちゃ どんどん』の絵本を読みきかせたが、『ばしん!ばん!どかん』の絵本は、絵が細かくたくさんあったからか、あまり関心を示さなかった。また、『がちゃがちゃ どんどん』の絵本は、音の言葉に対して書いてある絵が理解できなかったからか、すぐに興味を示さなくなった。次に、子どもたちが、絵本の絵をよく見ているのに気がつき、『いろのいろいろな絵本』シリーズを読みきかせたが、物の名前が書いてある程度で、絵に創造性や動きが感じられないからか、2冊読んだところで関心を示さなくなった。それで、もう一度繰り返しの言葉が書いてあり、絵に創造性がみだせる絵本を読みきかせることにした。その本は、『かかかかか』という絵本で、子どもたちは喜んでいて、この絵本は、単純で鮮明な絵で描かれ、リズムカルな言葉で、子どもが体験したことのある内容で書いてあることや、読み手が言葉を創作して読んだためか、言葉をまねて聞いていた。そのうち、音の出る絵本に出会ったので、『だんまり こおろぎ』の絵本を読みきかせた。この絵本は、繰り返しの言葉や最後にこおろぎの鳴き声が聞こえてくるからか、子どもたちは静かに聞き耳をたてていた。

今年度は、自閉傾向のある子どもたちが多いため、その子たちに合わせた絵本の読みきかせをした。このクラスの子どもたちの興味や関心のある絵本は ①絵は単純で鮮明、創造したくなるような描き方で書いてある絵本 ②内容的に繰り返しの言葉が出てくる本や音・メロディーが出てくる絵本に興味や関心をもつことがわかった。また、読みきかせる時は、沢山の絵本を読みきかせるよりも、良いと思った絵本を、何回も何回も繰り返して読みきかせるのがよいと思われる。



### (3) 中学部Cグループでの実践

#### ① Cグループの子どもたち

今年度も昨年度に引き続き、中学部Cグループの国語を担当することになった。このグループの子どもたちは、日常会話は支障なくできる生徒からことばによるコミュニケーションがとりにくい生徒まで能力差が大きく、また集中力や持続力が乏しい生徒がほとんどである。

そこで、読み書きを教えるよりも、一冊の本を通して共感しあい、豊かなことばを育てていきたいと願い、昨年同様、国語の授業に読みきかせを取り入れることにした。

#### ② 実践するにあたって

1学期までの実践より、子どもによって好みの本があるということがわかった。こわくてドキドキする本が好きなT君、くりかえしのあるリズムカルなことばが好きなA君。特に読み手の話すことばの意味を理解することが難しい生徒の場合、ことばのリズムやアクセント、高低などを感じさせることはできないかと考えた。また、絵をかくと黒一色で顔を描いたり、目をかくのに赤いクレヨンを選ぶこの子たちの色に対する意識を探りたくて、ことばあそびができる本、色について考えられる本を中心に本を選択し、様々なアプローチを試みることにした。

『なにをたべてきたの』  
『ぼくのくれよん』  
『まっくらネリノ』  
『きいろいのは ちょうちょ』  
『にんじんくんがあかいわけ』  
『いろいろへんないろのはじまり』  
『じぶんだけのいろ』  
『Colors』『エンとケラとポン』

『みんながおしえてくれました』  
『かかかかか』  
『きいろいのは ちょうちょ』  
『たあんき ぼんき たんころりん』  
『きょうはみんなでクマがりだ』  
『るるるる』

ことばあそびを中心に読みきかせた本

色あそびを中心に読みきかせた本

#### ③ 実践例

『まっくら ネリノ』

(ヘルガ・ガルラー作 偕成社)

この物語は色が黒いというそれだけの理由で、色のきれいな兄弟たちの仲間に入れてもらえないネリノが主人公である。遊び相手もおらずいつも一人ぼっちのネリノが、人間につかまって鳥かごに入れられた兄弟たちを闇夜の中で救い出すストーリーで、小さなネリノが読者に語りかける形で話が進む。黒いが故、疎まれ、暗い所ではどこにいるのかもわからないネリノ。子どもたちは黒という色をどのように

感じるだろうか。まっ黒のネリノの悲しみと喜びを伝えたいと思い、この本を選んだ。

**読みきかせ** 絵をゆっくりと見せながら心をこめて読みきかせる。兄弟とケンカしたり、友達とうまくいかないという経験は子どもたちにとって身近かなことであり、「ひとりぼっち」ということばを悲しみをもって受けとめられる子どももいた。しかし、黒い画面に描かれたネリノは近寄って見ないと見分けが付きにくく、黒と他の美しい色とのコントラストも受けとめにくい。また、動きの少ない本の中では「ひとりぼっち」を感じとめることは難しい。

**ネリノを作る** そこでPペーパーを切り抜き、色をぬって鳥たちを作ることにした。絵本を見ながら同じ色のクレヨンを選びぬっていく。みんな色ぬりに夢中である。白ネルのパネルに貼っていくと、絵本の世界から飛び出したかわいい小鳥たちに子どもたちもうれしそうである。絵本にはなかなか注目できないK君もパネルに鳥がくっついているのが不思議なのかじっと見ている。

**Pシアターであそぼう** 「さあ、夜になったよ」といいながら黒ネルのパネルに鳥たちを移していく。背景が黒地では黒のネリノは見えにくいということが、ここで実感としてわかったようだ。さらに、仲良く遊ぶ兄弟と一人ポツンと離れたネリノを鳥の人形を動かしながら「あっちいけよ」「おまえなんかきらいだよ」と絵本にはないことばを加えて演ずる。『「Mちゃんきらい、あっちへいって」っていわれたらどうする?』と尋ねると「いや」と顔を覆うM子。きれいな色と黒。ネリノの疎外された悲しみ、黒のもつ重いイメージが伝わったのかどの子の顔も真剣である。

**読みきかせ** 最後にもう一度絵本に戻り仲良しになった鳥たちをパネルに並べると、それまでの緊張が解けて子どもたちも安堵してにこっと笑う。ホッとした暖かな思いを共有し合ったひとときであった。

#### ④ 考 察

絵本の中の美しい色、きれいな色、さみしい色、暖かい色。絵の色から受けるイメージは様々である。ここでは色の名称を教えこんだりするのではなく、日頃、色を漠然としてしか意識していない子どもたちが、しっかりと色を意識してくれるよう、色をぬったり、色あそびを楽しむ活動をたっぷりと取り入れた。中でも自閉傾向のA君はクレヨンを好み、「おえかきするよ」と言って黄土色のクレヨンを選ぶ。1学期には落ち着かなかった彼も、大好きな色ぬりができる時間としてグループ学習を楽しみにするようになり、みんなと同じように学習に参加できるようになって

きた。読みきかせをするときは「えほんよむよ」と自分で言って本を手にとったり、読み手のことばを繰り返すつぶやいたり、視線はなかなか向けてくれないものの、色であそぶという活動を通して、一步、絵本に近づけたのではないかと思う。

色についての本というと色が主題になった本に目が向きがちであるが、そうではない本についても、色を使っての様々な活動を楽しみながら楽しい読みきかせができるのではないかと思う。また、本来、色については他の教科で扱うことが多いと思うが、読みきかせをより充実したものにするためにあえて国語のグループ学習の枠の中に色についての学習を取り入れたのであり、逆に言えば、他の教科で読みきかせをどんどん取り入れていけると考えられる。

また、日頃、私たちはあまり意識せずのことばをしゃべっているが、そのリズムや抑揚を生かしてことばあそびとして取り上げ、ことばによる表現のおもしろさと読みきかせを結びつけると、ことばを聞きとったり、注視することが難しい子どもたちもリズムカルなことばにはよく聞き入って楽しそうな様子であった。

#### ⑤ まとめと今後の課題

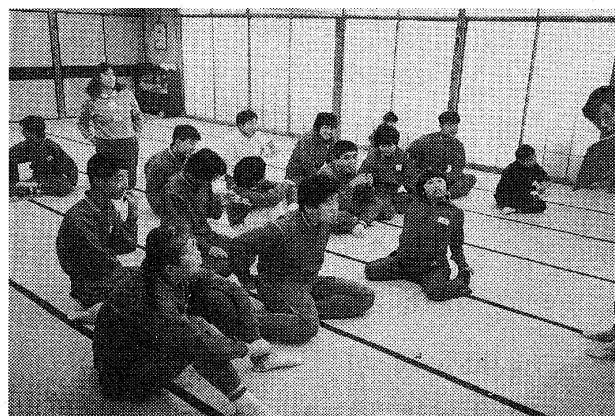
視線を共有することが難しい子どもも含め、このグループの7名の子どもたちに対し様々な工夫を試みながら読みきかせ、一対一の読みきかせでは味わえないもの——子ども同士の共感関係——を大切にしながら一人ひとりの感性をゆさぶり、ことばを育てたいと考えてきた。

4月当初は落ち着かず立ち歩くことが多かった子どもも落ち着きをみせ、一冊の本をみんなで楽しもうとする雰囲気ができつつある。

しかし、どんな本を選び、どう読みきかせるかは読み手の感性や技量がためされる場でもある。子どもたちの視線や表情を受けとめながら、授業の中での読みきかせをこれからも考えていきたい。



(中学部Cグループ)



(校内「絵本の日」)

(4) 高等部「わあ これは いい」と、心を開くようになったCグループ

高等部では3学年全員を学習指導上5つのグループに分けて行うグループ学習がある。その中の国語(言語)の分野で「読みきかせの授業」を行なっている。

グループ名をここでは、A・B・C・D・Eとする。

読みきかせの授業は今年で10年になる。各グループの生徒の実態に応じて、本の選び方や読みきかせ方を考慮し、ひとりでも多くの生徒が感動(おもしろい かわいい 優しい かわいそう等、また、登場人物などへの思いを含めて)をもつように研究実践してきた。昨年度は読みきかせた絵本を更に意識づけその感動をクラスの友達と交流できるように各教室に「読書コーナー」を設けた。これは各グループで読みきかせた絵本の表紙を縮小コピーし貼付していくのである。また、感想文集をつくり自分の感想文や友達の感想文を読み合い、その絵本の良さや楽しさをもっている。このような手だては今年も続けている。

ところで、今年度は感動の弱いCグループの生徒に特に視点をあて研究実践をした。

① 読みきかせの授業の時間割と生徒の実態

グループ	人数	(火)	(水)	(木)	読みきかせでの生徒の実態
		3・4	3・4	2・3	
A	9				読み書き・音読はよく出来るが、自閉傾向の生徒は聞き入れが弱い。
B	6				自閉傾向の生徒は場面毎の感動だが、他の生徒は感動・感想も良い。
C	6				自閉傾向や知恵おくれもあり、内容理解が浅く感動も弱い。
D	5				あまりことばの無い生徒もおり、場面毎に心をゆさぶるが感動表現が弱い。
E	4				全くことばの無い生徒もいるが、個別に読みきかせると絵本を楽しむ表情がよい。

② Cグループ「読みきかせの授業」での生徒の実態

読み書きは不十分であり集中力はないが、読みきかせをととても楽しむH男とK子。絵本の内容理解は充分でなく弱視のため絵本の中の絵からの感動は無いが、話を楽しく聞くA子。読み書きや音読も正確だが自閉傾向のため話を聞き入れる力が弱く、読みきかせでの感動表現が殆どないS男、M子、H子の6名である。

③ Cグループでの読みきかせ

毎週木曜日 2限(40分間) —Dグループと共に

15分間の休憩

3限(40分間) —Cグループだけで

2限目は11名ということもあり、Dグループ担当の教師も参加され、生徒たちの心をゆさぶり感動表現へと介助して下さる。この時間は20分～25分ぐらいで読め

る絵本をとりあげている。その後、感想やその本の良さ（意図）を板書し、生徒は一定形式の用紙に板書のことばを書き写す。最後に、本時での絵本の楽しさと良さを再認識させるために、板書したことばを教師と共に音読し授業を終る。

つづいて、3限目にはCグループの生徒に、また、別の絵本の読みきかせをする。

・ Cグループの1学期をふりかえって

CグループとDグループとの11名の2限目の読みきかせは人数が多いのと、障害にいろいろのちがいがあるので、考慮して心をこめて一人ひとりを見つめ、気づかせることを大切にして読みきかせをした。板書することばも考えておき（教材研究の一つ）、その絵本への意図を意識させるようにした。

この時間にDグループも共にということは人数が多くても私にとっては喜びである。それは、グループ学習の時間割の上でDグループだけの時間がとれないため、このグループの生徒にも、読みきかせでの絵本の楽しさ（心情の豊かさ）を少しでももたせたいと思っていたからである。

しかし、2限目での生徒たちは、場面毎でのおもしろさ楽しさの感動表現は少しみられたが、この時間は楽しかったというより、やや緊張していた様子だった。もっと心をほぐし、読みきかせの楽しさをもつような本の選択や手だてを考慮しなければならなかったと思った。

つづいて、15分の休憩をはさんで教室も移動して、3限目にはCグループだけの読みきかせの授業となる。生徒たちはほっとしたような疲れたような様子である。

特にS男とK子は。そこで、この時間には内容が単純でわかりやすく、絵も鮮明でことばのリズミカルな軽く楽しめる絵本をとりあげていた。しかし、殆どの生徒は読みきかせを楽しめない。全く疲れた表情である。

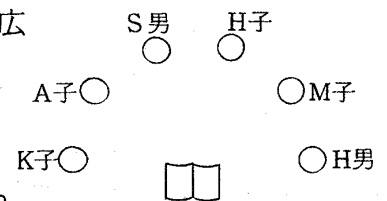
2学期には、Cグループの3限目には、一人ひとりが絵本の楽しさをもつような手だてをとらなければと反省した。

④ Cグループ 2学期からの実践

(実践 1) ー 心をやわらげる場で ー

9月26日(木) 3限 教室の机・椅子を片隅によせ、カラーマット2枚(赤・青)を敷き、ブックをぬいで、顔を見合わせるように自由な場に座らせた。

生徒たちに緊張感を与えないように、心をやわらげ心が広がる場を設定した。今までのように、読みきかせをする本の題名も、その本の意図や感想も板書をせず、気楽に読みきかせをした。題名などの記録は教師が後で書くことにした。



『ひこうきパン』を読みきかせて

- この絵本をとりあげたわけ——ふんわりと焼かれたパンの香りや形は想像しやすく感動がもてる。話の内容も想像が広がりやすく理解しやすい。そのため鮮明な絵と共にどの生徒もおもしろさ（感動）をもつことができるだろう。
- まず、みんなの前に絵本を出して読みきかせをする。時々、一人ひとりの生徒の前に近づけ絵を見やすいようにもする。みんな絵本を見ていた。自閉傾向のS男、M子、H子も最後まで絵本を見ていた。やはりこの絵本のおもしろさがわかった（気づいた）からだろう。

読み終わったらすぐに、H男「ぼくに見せて」と言う。M子はもう絵本から目がそれていた。「じゃ H君、もう一度、この本、みんなに読んであげて」「うん」と、H男はほんとに嬉しそうに絵本を手にした。まるで自分の本という満足そうな姿勢で。H男は“読みきかせ”で聞いていたことばと、自分の思い出のことばと重ねながら、短い文でさっさと話をしながらページをめくっていき、最後まで読んだ。

他の5名は、また、なんとなくH男の話し言葉にひきつけられるように絵本を見ていた。

H男のこの嬉しそうな自信ありげな口調には全く感心した。この話し言葉やページをめくる速さ等は、絵本を読むことを楽しみはじめる3才ぐらいの子どもの姿であったが、これからはCグループでこの手だてをとり、絵本に対しての楽しさ、豊かな感動を育てていくことだと思った。

この後、K子が「私も」と言ったので絵本を渡したが、黙って絵を見ながら自分で楽しんでた。他の4名も（特に弱視のA子は）このように自分でゆっくりとページをめくり、楽しく絵本を見たかったと思う。なお、読み手の教師も心軽く楽しく読みきかせができ、一人ひとりの生徒の心をゆったりと見守り言葉かけができた。

このような場をもったことにより、読み手と聞き手とのコミュニケーションがもたれ、絵本の楽しさを共有でき、生徒の心がより豊かになることをあらためて思った。

## （実践 2） — 自分の手で好きな本を!! 一人ひとりに読みきかせを!! —

11月26日（木）3限 K子欠席 ～和室で自由読書を～

教室でカラーマットを敷いた場よりも、広い和室で、畳の上でのやすらぎで、気楽に心が広がりやすい場をもった。そこで、事例1での反省もふくめ、自分の手で好きな絵本を取り自分の本として楽しめる心をもたせることにした。そして、絵本への感動（気づき）をもたせるために個別の読みきかせもとりにれた。

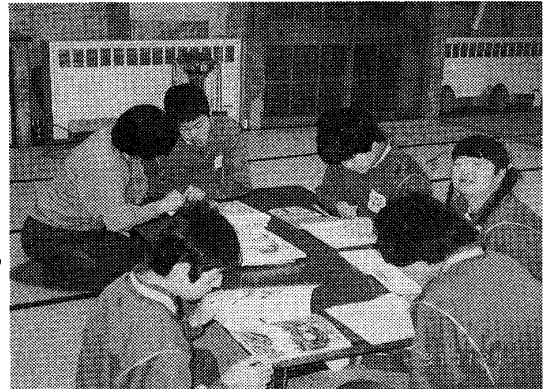
まず、今まで読みきかせたものや楽しめる絵本もと思い、15冊を机の上に並べた。例えば『もしもし おかあさん』『はじめてのおつかい』『ぼくのうちどこ』

『はらぺこあおむし』『くいしんぼうのはなこさん』等。

「わあ、これは いい」と言って、すぐ手を出したのはH男。また、にっこりとしてすぐ絵本を開いたのは弱視のA子。「みなさん、このテーブルのすきなところに座って。この時間は自分で好きな本を自由に読んでいいのよ。先生も一人ひとりに読んであげるからね」と。すぐに音読を始めたのがH子だった。『はじめてのおつかい』を歯ぎれのよい声で疲れる様子もなく1冊全部読んだ。話の内容についてはあえて尋ねなかった。とにかく自分の本として読み通した姿にはほっとした。このH子にも個別に読みきかせの場をもち、絵本の楽しさに気づかせ、心情を豊かにしていきたいと思った。

H男もA子も「先生、読んでいらん。自分で読むから」と言って、ゆったりと絵本の世界にひたっていた。自閉傾向のM子は1冊だけさっと音読したがその後は友達の読んでいる姿を見ているだけだった。S男には今までに読んだ『くいしんぼうのはなこさん』を読みきかせたが全く感動はなかった。M子にも読みきかせをしたが無理をしてはいけないと思い途中でやめた。H男もA子も次々と絵本をとりかえて楽しんでいった。絵本の好きなK子がこの場にいたら、きっとにこにこ絵本を手にして楽しんだことだろう。

Cグループの3限目のこの実践は今後も続け、個々の生徒の感動(気づき)を受けとめていきたい。そして、絵本の楽しさを通して生徒たちの心情を少しでも豊かにしていきたい。



⑤ 「読みきかせの授業」をふりかえって

各グループの生徒の実態に応じて読みきかせる絵本を考慮してきた。Aグループでは民話や文学作品・創作物語絵本などを。しかし、話を聞く力の弱い自閉傾向の生徒には興味をもつような絵本も読みきかせ、全員が心から楽しめることもした。Bグループの生徒は読みきかせを楽しみ感動表現や感想がよく、自閉傾向の2名も他の4名の感動をうけ絵本を見ていた。Cグループは上記のように研究実践をした。Dグループは読み手である教師のことばかりで生徒は自分の興味意識に合った場面ではうなづきや絵に指さし等していた。Dグループは感動表現は弱い、Cグループの生徒たちと絵本の楽しさが共有できたようだ。障害の重い生徒にも絵本への楽しさは必ずもっている。休憩時に折よく出会うEグループの生徒に個別に絵本を読みきかせているが、にっこりと心をやわらげ、読み手の教師の顔をみたり絵に指さしをしたり、その表情はとても豊かである。生徒の一人ひとりを知り、絵本の選択や読みきかせでの手だてを考慮し、生徒たちと共に絵本を楽しんでいきたい。

(5) 校内「絵本の日」

全校の子どもたちに呼びかけて昼休みに和室で読みきかせる「絵本の日」がスタートして3年目をむかえ、毎週水曜日の昼休みに行われる「絵本の日」は子どもたちにも定着してきたようである。

私たちは、過去2年間「絵本の日」を続ける中で、絵本の楽しさを知ってもらおうと、たくさんの本を読みきかせてきたが、今年度は、「絵本の日」に集まってくる子どもたちと教師が感動を共有し、その感動を伝え合うことで絵本の楽しさを味わってほしいと考えた。そこで、読みきかせする本の内容を再度検討することにした。また一人でも多くの子どもたちが参加できるよう他の学級担任からも呼びかけてもらった。

絵本の日の一日

登校時	看板 ・ 玄関 ・ 小ホール
12 : 40	校内放送
12 : 45	手あそび ・ 読みきかせ
1 : 05	読書カード配布

「今日は絵本の日です」という放送の声もすっかりなじみになり、子どもたちは、「今日は〇〇先生かな」「今日はどんな本かな」と楽しみに集まってくる。小学部では、「絵本の日」の雰囲気を楽しむ子もいるが、中にはいっしょうけんめい聞きいている子もいる。高等部では、本の好きな子が集まってくる。中でも高等部のNさんは、中度の知恵おくれで、中学時代は、特殊学級に籍を置いていたが、文字に対して抵抗があり、発表することもほとんどなかった生徒である。Nさんは、高等部へ入学してからグループ学習で絵本の楽しさを知り少しずつ本を読むようになってきた。特に「絵本の日」は、Nさんにとっていろいろな本に出合えることが楽しみでほとんど毎週参加している。ゆったりとした雰囲気この会は、Nさんの心を開かせ、心に感じたこと、思ったことを自然と発表できるようになってきた。

「絵本の日」に集まってくる子どもたちは、学年や障害も違うため本の選択や読む技術など、読みきかせを楽しいものにするための手だてを考えるために、週2回のグループ研究会のうちの1回は、内容の検討や、読みきかせの工夫を話し合い、2回目のグループ研究会のときに「絵本の日」で読んだ反省を行い、次回への参考としている。今後もこの実践を積み重ね、絵本の楽しさを伝えるために一人でも多くの子に読みきかせを行っていきたい。



「絵本の日」

		書名	とりあげた理由と読みきかせでの配慮	子どもの反応と反省
3 回 目	5/15	くいしんぼうのはなこさん	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わがままで、食いしんぼうでついにお腹を痛め大きな注射で助かるという話で、子どもたちにとって心動く内容である。</li> <li>・はなことという牛の可愛さ、そして、わがままであるが、まわりの牛たちが、がまんをしたり優しくかばうという仲間の心情を子どもたちに伝えるような読みと言葉かけを配慮する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部の子どもたちは、「お腹、ぼんぼん、お腹痛くなるよ」と牛のはなこを見ていた。</li> <li>他の中・高等部の子どもたちも「あらら、だめだめ」「かわいそう」というつぶやきもあり殆どの子どもの感動表現がみられた。</li> <li>・読み手の教師も子どもたちの感動表現に励まされた。</li> </ul>
13 回 目	9/18	三ねん ねたろう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話は長いが小学部の子どもたちには、ぐうぐう寝てばかり…が面白いだろう。中・高等部の子どもたちには、ねたろうはやがて村のために米づくりをするという内容はわかるだろう。ぜひ、このような民話を読んでやりたいと思ったから。</li> <li>・ぐうぐう寝ている場は楽しませるように、川の水をひく仕事の場では言葉を補っていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部の子どもたちは、やはり「ぐう ぐう」といういびきでは面白がった。最後まで話は楽しめなかった。</li> <li>・高等部の中でも理解しにくい子どもはいたが、中学部のA子は膝をのり出し真剣な目で、うなずきもあった。</li> <li>・集まった子どもたちみんなが、楽しめなくても民話や考え合う絵本もとりあげていくことの大切さも思った。</li> </ul>
19 回 目	10/30	三びきのやぎのがらがらどん	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三びきのやぎが智恵と勇気を持って困難を乗り越え目的を達成していく内容であり、話しが繰り返されていてわかりやすく橋を渡る時のリズムカルな擬態語が楽しい。</li> <li>・トルロとやぎの言葉のやり取りの楽しさを男（トルロ）女（やぎ）の二人の教師の読みきかせを通して伝えていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・橋を渡る時のリズムカルな擬態語を読み手と一緒に咬いたり、身体を揺する姿が見受けられた。</li> <li>・男女二人の教師が読みきかせたことでトルロ（男）の迫力が印象づけられ、子供達は興味を持って聞き入っていた。</li> <li>・二人での読みきかせであったため絵本の提示が十分でなかったかもしれないが、感動をもった読みきかせができた。</li> </ul>
24 回 目	12/18	まいごになつたぞう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ぞうの赤ちゃんがまいごになりおかあさんをさがしに行く途中、いろいろな動物に出会うという内容である。話がかんたんでわかりやすく、ぞうの赤ちゃんが何を聞かれても「あばば、うぶー」という、くりかえしのおもしろさを味わい楽しんでもらいたい。</li> <li>・それぞれの動物が表情豊かに描かれているので、子どもたちもよく見てくれるのではないかと思取りあげた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部2年のNさんがぞうの赤ちゃんの泣き声、「あばば、うぶー」D君がぞうの赤ちゃんがころがっていく場面を、それぞれ楽しみながら読み手といっしょになって読んでくれたことが、読みきかせを、一層楽しくしてくれた。</li> <li>・短い絵本でもあり、子どもたちが楽しんだので、再度繰り返し読んだところ、より多くの子どもたちが楽しむことができた。</li> </ul>

#### 4 まとめと今後の課題

子どもたちの心をゆさぶり豊かな感性を育てようと、今年はさらに一人ひとりの子どもの視線をみつめ、子どもの気づきをうけとめながら、絵本の読みきかせの研究（絵本の選択・手だて等）と実践をしてきた。各学部の実践例にも記されているように、子どもたちは絵本への楽しさ（いろいろの感動表現はあるが）をもつことが多くなってきている。また、教師も今までよりも読みきかせを通して子どもたちと絵本の楽しさを共有することができた。

なお、本校では毎年各学部とも子どもたちに出会わせたい絵本が購入されている。一人でも多くの子どもが絵本を楽しめるように1冊でも多く、そして、子どもたちの身近かに置くこと等と図書の実と配架にも留意してきた。

このように、今年度の研究実践の成長はみられるが、更に、子どもたちの感性（心情）を豊かにするために、子どもを知り（興味・関心・今ねがっていること等）、絵本の選択や読みきかせの手だてを研究し、読み手である教師の感性や技術を高めることの大切さを感じる。

そして、今までの実践を通して見た良い絵本と、数多く出版されている絵本を手にとり『子どもたちに読みきかせたい絵本のリスト』づくりを今後の課題としたい。

#### 読みきかせた絵本から （4月～12月）

##### 『絵本の日』

書名	作	絵	出版社
おおきな かぶ	内田莉莎子(再話)	佐藤忠良	福音館書店
は は はるだよ (詩)	与田準一	西巻茅子	金の星社
すっきりうんち	七尾純	守矢るり	あかね書房
くいしんぼうのはなこさん	石井桃子	中谷千代子	福音館書店
なにを たべてきたの	岸田衿子	長野博一	佼成出版社
ぞうくんのさんぽ	なかのひろたか	なかのひろたか	福音館書店
とんだドーナツ	田沢梨枝子	田沢梨枝子	岩崎書店
りんごがドスーン	多田ヒロシ	多田ヒロシ	文研出版
3びきのくま	ガルドン	ガルドン	ほるぷ出版
おさじさん	松谷みよ子	東光寺啓	童心社
かかかかか	五味太郎	五味太郎	偕成社
すいかのたね	さとう わきこ	さとう わきこ	福音館書店

きょうは みんなで クマがりだ	マイケル・ローゼン (再話) 山口 文夫 (訳)	ヘレン・ オクセンバリー	評論社
三ねんねたろう	大川 悦生	渡辺 三郎	ポプラ社
とんぼのうんどうかい	かこ さとし	かこ さとし	偕成社
へそとりごろべえ	赤羽 末吉	赤羽 末吉	童心社
くじらのなみだ	今井 鴻象	富永 秀夫	岩崎書店
りんごが ひとつ	いわむらかずお	いわむらかずお	銀河社
にんじんさんが あかいわけ	松谷 みよこ	ひらやまえいぞう	童心社
三びきのやぎの がらがらどん	せたていじ (訳)	マーシャ・ブラウン	福音館書店
ぼくのうち どこ	なかえ よしを	上野 紀子	ポプラ社
14ひきの おつきみ	いわむらかずお	いわむらかずお	童心社
キャベツくん	長 新太	長 新太	文研出版
おじさんの かさ	さ の ようこ	さ の ようこ	銀河社
まいごになった ぞう	寺村 輝夫	村上 勉	偕成社

小学部2組

11ぴきのねこ	馬場 のぼる	馬場 のぼる	こぐま社
あかんべノンタン	おおとも さちおみ やすこ	おおとも やすおみ さちこ	偕成社
ノンタンノサンタクロースだよ	〃	〃	〃
ノンタンぶらんこのせて	〃	〃	〃
ノンタンのたんじょうび	〃	〃	〃
あおいふうせん	ミック=インクペン	角野 栄子 (訳)	小学館
あそびにきてください	なかえ よしを	上野 紀子	ポプラ社
おふろやさん	西村 繁男	西村 繁男	福音館書店
カジパンちゃんちは 何屋さん?	きたやまようこ	きたやまようこ	偕成社
いっぼんばし わたる	五味 太郎	五味 太郎	絵本館
どろんこ	長谷川 摂子	英 伸三 (写真)	福音館書店
あおくとときいろちゃん	レオ・レオーニ	レオ・レオーニ	至光社
みんなうんち	五味 太郎	五味 太郎	福音館書店
はらぺこ あおむし	エリック=カール	もりひさし (訳)	偕成社
ばったくん	五味 太郎	五味 太郎	福音館書店
くじらのなみだ	今井 鴻象	富永 秀夫	岩崎書店
三びきのやぎのがらがらどん	マーシャ・ブラウン せたていじ (訳)	マーシャ・ブラウン	福音館書店

小学部3組

ころ ころ ころ	元 永 定 正	元 永 定 正	福音館書店
もこ もこもこ	谷 川 俊太郎	元 永 定 正	文 研 出 版
ががががが	五 味 太 郎	五 味 太 郎	偕 成 社
だんまり こおろぎ	エリック=カール	くどうなおこ(訳)	"

中学部Cグループ

なにをたべてきたの	岸 田 衿 子	長 野 博 一	佼成出版社
ぼくのくれよん	長 新 太	長 新 太	銀 河 社
まっくろネリノ	ヘルガ・ガルラー やがわすみこ(訳)	ヘルガ・ガルラー	偕 成 社
きいろいのはちょうちょ	五 味 太 郎	五 味 太 郎	"
にんじんさんがあかいわけ	松 谷 みよこ	ひらやまえいぞう	童 心 社
エンとケラとプン	いわむらかずお	いわむらかずお	あかね書房
みんながおしえてくれました	五 味 太 郎	五 味 太 郎	絵 本 館
かかかかか	"	"	偕 成 社
きょうはみんなでクマがりだ	M.ローゼン(再話) 山口 文夫(訳)	H・オクセンバリー	評 論 社
なんだこりゃたまご	ジェラルド・ローズ おさなぎひとみ(訳)	ジェラルド・ローズ	ほるぷ出版

高等部Aグループ

村いちばんのさくらの木	来 栖 良 夫	斎 藤 博 之	岩 崎 書 店
ましろのあさ	いもと ようこ	いもと ようこ	金 の 星 社
あやのねがい	黒 河 松 代	赤 坂 三 好	"
おならをした かかさま	水 谷 章 三	太 田 大 八	ほるぷ出版
ベトちゃん ドクちゃんからのてがみ	松 谷 みよ子	井 口 文 秀	童 心 社
八 郎	斎 藤 隆 介	滝 平 二 郎	福 音 館 書 店
おじさんのかさ	さ の ようこ	さ の ようこ	銀 河 社
たなばた	君島久子	初 山 滋	福 音 館 書 店
100まんびきのねこ	ワンダ・ガアグ いしいももこ(訳)	ワンダ・ガアグ	"
まっくろネリノ	ヘルガ・ガルラー 矢 川 澄 子(訳)	ヘルガ・ガルラー	偕 成 社
ろくべえ まってろよ	灰 谷 健次郎	長 新 太	文 研 出 版
あそびにきてください	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
やまいっぱいのぎんか	君 島 久 子	太 田 大 八	偕 成 社
へそどろぼう	たかし よいち	長 野 ヒデ子	岩 崎 書 店
ごんぎつね	新 美 南 吉	黒 井 健	偕 成 社
鯉にようぼう	松 谷 みよ子	西 山 三 郎	岩 崎 書 店

高等部Bグループ

村いちばんのさくらの木	来 栖 良 夫	斎 藤 博 之	岩 崎 書 店
ひとりで おつかい	しみず みちを	岩 淵 慶 造	”
ましろのあさ	いもと ようこ	いもと ようこ	金 の 星 社
あやのねがい	黒 河 松 代	赤 坂 三 好	”
おならをした かかさま	水 谷 章 三	太 田 大 八	ほるぶ出版
八 郎	斎 藤 隆 介	滝 平 二 郎	福音館書店
おじさんのかさ	さ の ようこ	さ の ようこ	銀 河 社
やまいっぱいのぎんか	君 島 久 子	太 田 大 八	偕 成 社
やまなしもぎ	平野 直(再話)	太 田 大 八	福音館書店
くいしんぼうのはなこさん	いしい ももこ	中 谷 千 代 子	”
きつねとつきみそう	こわせ たまみ	いもと ようこ	金 の 星 社
ぼくのうち どこ	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
うれしい うれしい クリスマス	長 野 博 一	長 野 博 一	小 峰 書 店
鯉にようぼう	松 谷 みよ子	西 山 三 郎	岩 崎 書 店
スーホの白い馬	大塚勇三(再話)	赤 羽 末 吉	福音館書店

高等部Cグループ

ましろのあさ	いもと ようこ	いもと ようこ	金 の 星 社
りんごが ひとつ	いわむらかずお	いわむらかずお	銀 河 社
まいごになった ぞう	寺 村 輝 夫	村 上 勉	偕 成 社
もしもし おかあさん	久 保 喬	いもと ようこ	金 の 星 社
ひとりで おつかい	しみず みちを	岩 淵 慶 造	岩 崎 書 店
は は はるだよ(詩)	与 田 準 一	西 卷 茅 子	金 の 星 社
三びきのやぎのがらがらどん	マーシャ・ブラウン せた ていじ(訳)	マーシャ・ブラウン	福音館書店
ちょっと 入れて	さとう わきこ	さとう わきこ	偕 成 社
りんごがたべたい ねずみくん	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
まっくろネリノ	ヘルガ・ガルラー 矢川 澄子(訳)	ヘルガ・ガルラー	偕 成 社
おじさんのかさ	さ の ようこ	さ の ようこ	銀 河 社
ぼくのうち どこ	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
あそびにきてください	”	”	”
へんてこ へんてこ	長 新 太	長 新 太	佼成出版社
ねずみのすもう	樋 口 淳	二 俣 英五郎	ほるぶ出版
ねこのジョン	なかえ よしを	上 野 紀 子	金 の 星 社

とんぼのうんどうかい	かこさとし	かこさとし	偕成社
ひこうきパン	高浜直子	古川日出夫	PHP研究所
きつねとつきみそう	こわせたまみ	いもとようこ	金の星社

高等部Dグループ

もしもし おかあさん	久保 喬	いもと ようこ	金の星社
は は はるだよ (詩)	与田 準一	西巻 茅子	”
三びきのやぎのがらがらどん	マーシャ・ブラウン せたていじ(訳)	マーシャ・ブラウン	福音館書店
りんごがたべたい ねずみくん	なかえ よしを	上野 紀子	ポプラ社
まっくろネリノ	ヘルガ・ガルラー 矢川 澄子(訳)	ヘルガ・ガルラー	偕成社
おじさんのかさ	さの ようこ	さの ようこ	銀河社
あそびにきてください	なかえ よしを	上野 紀子	ポプラ社
ねずみのすもう	樋口 淳	二俣 英五郎	ほるぷ出版
とんぼのうんどうかい	かこさとし	かこさとし	偕成社
きつねとつきみそう	こわせたまみ	いもと ようこ	金の星社

内田 明德      竹森 明美      今井 康弘  
 名倉 雅子      熊野 嘉子      勝尾外美子